

偏差値という価値観からの脱却

6月4日は、虫の日です。また、虫歯予防ディでもあります。

1989年の6月4日は、中国で天安門事件があった日です。30年が経過しました。民主化運動が弾圧され、幾多の生命が蹂躪されました。中国のこの30年は、まさに激動の30年でした。

東京での高等学校長会の総会で、脳学者の茂木健一郎氏が講演し、印象深いことを我々に託しました。

- 1 偏差値で推定できる大学入学試験という関門の通り方について、偏差値という価値観自体が疑わなければならないのではないか。
- 2 偏差値によって人間の価値が決まるわけではないので、やりたいことを見つけることが先決である。そんな世の中が必ず来る。
- 3 個性を生かす存在でいるべきである。自分のことは、自分が一番見張っていないなければならないものだ。

おおむねこんな内容から、彼が主張した事柄は、東大という偏差値の教育は、入学後も、入学時にどのような偏差値や入学試験での点数であったかという価値観に縛られる存在を生んで、そのヒエラルヒーから脱却できない。その点、ハーバード大学では、入学試験は100人がいたら100通りの入り方があり、その内容はブラックボックスである。しかし、人間の能力が多様であり、現代を生きる能力の養成という観点からは、まさに探求学習を行う人物たちであふれている。

そして、決定的な言葉を言うのである。

現代は、教育者の価値観が問われる時代である。

一人の教育者からすべてが始まっていく。

人間が多様であり、豊かであることを支えるのは、教育者の価値観である。

このAI時代の中、将棋のコンピュータソフトのアルファゼロが到達したルートは、ひたすら自分自身を自分自身と対決させ、ルートの強化を図るシステムづくりを繰り返しながら、与えられたある評価関数によって、いかに早く達成できるかを徹底していくことだったということです。

この時の評価関数は、王を詰めることです。

アルファゼロができないことは、評価関数を指定することです。

すなわち、何を持って価値とするかを定めることが、唯一人間のすることになることが予想できます。

さらに言えば、価値は勝ちなのでしょうか。豊かさなのでしょうか。

何を価値とするかを決めていく仕事を教育者として議論していくことが大きな意味を持つ時代ということが言えると感じた一日でした。